

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

No.71

163-04 東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F
Phone: 03-3344-1701-3
Fax: 03-3342-6911

Feb.1995

特集：トヨタ財団設立20周年記念国際シンポジウム

トヨタ財団では、1995年1月9日（月）より11日（水）までの3日間、国際交流基金日米センターおよびフォード財団との共催、国際文化会館との協力により、これからの国際文化協力のあるべき姿について話し合う機会として『21世紀アジア太平洋の文化の課題—国際文化協力を考える—』と題した国際シンポジウムを都内2つの会場にて開催した。また今年度は当財団設立20周年にもあたるが、両会場とも200人を越す大勢の方々の参加を得、充実したシンポジウムとなった。

第1日は、トヨタ財団理事長飯島宗一の開会挨拶に始まり、川田順造氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）による「地域文化の主体性と創造力を求めて」と題した基調講演を出発点に、石井米雄氏（上智大学アジア文化研究所所長）の司会による5名のパネリストを交えたパネル・ディスカッションが行われた（詳細はP2以下を参照のこと）。

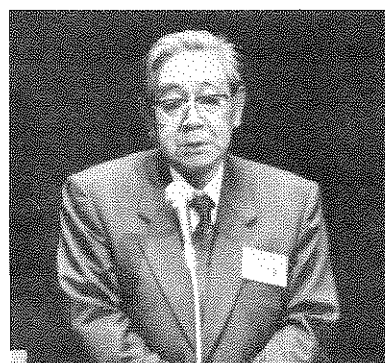
第2日は、2つの部会に分かれて合計5つのセッションがもたれた。これらの部会は第1部会が「開発と文化—地域・参加・アイデンティティ」のタイトルのもと3つのセッション、第2部会が「グローバリゼーションと文化—変容、創造、そして共存」のタイトルのもと2つのセッションからなっていた。

第1部会「開発と文化—地域・参加・アイデンティティ」では、「開発と文化—伝統文化の保存をめぐる」というテーマで「文化財保存と観光開発—地域と住民の発展からとらえなおす」および「無形文化の保存、普及、継承—伝統保持と時代適応、市場性」という2つのセッション、「NGOと文化協力—地域社会、参加、アイデンティティ」という1つのセッションがもたれた。これら3セッションは、それぞれコーディネーターに3～4名のパネリストを交えた議論という形で進化した。コ

ーディネーターは、先のセッション順に石澤良昭氏（上智大学外国語学部長）、徳丸吉彦氏（お茶の水女子大学教授）、生江明氏（社会開発国際調査センター代表）の3方であった（各セッション毎の詳細はP5以降を参照のこと）。

第2部会「グローバリゼーションと文化—変容、創造、そして共存」では、「越境する大衆文化—一つのアジア大衆文化の成立なのか」および「転位された文化—ディアスポラ状況での文化創造と喪失経験」と題した2つのセッションがもたれた。こちらの2セッションも、第1部会と同様コーディネーターおよび3～4名のパネリストを交えた議論という形で進化した。コーディネーターは、セッション順に橋爪大三郎氏（東京工業大学助教授）、今福龍太氏（中部大学助教授）である（各セッション毎の詳細はP10以降を参照のこと）。

第3日は、ピーター・ガイスナー氏（フォード財団アジアプログラム・ディレクター）の議長による「文化と国際協力」と題した総括討論であった。このシンポジウムに先立ち昨年11月にタイのノンカイおよびベトナムのハノイにて開催した「文化」をテーマとしたシンポジウムの報告（トヨタ財団主催による）、また梶原景昭氏（大阪大学人間科学部助教授）他3名のコメントーターからの発言を踏まえた討議が熱心にくりひろげられた（詳細はP14を参照のこと）。



▲飯島理事長

(注)今回はシンポジウム特集のため新刊紹介、「UP TO DATE」は、お休みいたします。

2 基調講演
パネルディスカッション

5 第1部会
「開発と文化—地域参加・アイデンティティ」

10 第2部会
「グローバリゼーションと文化—変容、創造、そして共存」

14 ノンカイおよび
ハノイ・シンポジウム報告

基調講演：「地域文化の主体性と創造性を求めて」

パネルディスカッション：

「21世紀アジア太平洋の文化の課題－国際文化協力を考える－

基調講演

川田順造氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）より「地域文化の主体性と創造性を求めて」と題した基調講演が行われた。以下に司会の石井米雄氏によるまとめを紹介する。

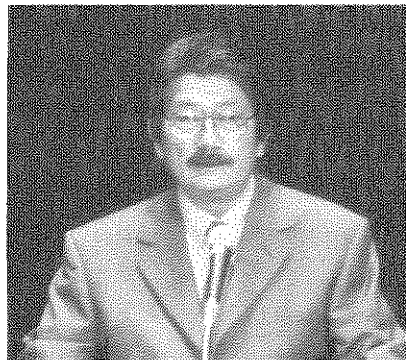
①文化の世界的均一化の進行

我々の課題は今日のアジア太平洋地域の文化の置かれている状況を理解することである。その理解を前提として国際文化協力を考えるということが今回の三日間のシンポジウムに課された大きな題材である。近代化とその帰結として生まれた開発という一つの状況によって人類の文化が画一化の方向に向かっているという基本的な認識がまず必要なのである。こうした均一化が進行している状況の中でむしろ我々は全人類的な視点に立って地域文化の多様性と創造性の意味を問いただし、そして文化協力を通して創造の可能性を探求する必要があるのではないか。

②不可分な技術と精神

日本を例としての外国文化の摂取の歴史とその結果として見いだされた文化的アイデンティティーの特徴、あるいは日本独自の大変微妙な立場というものについての指摘、説明である。日本は、福沢諭吉によって代表される「脱亜入欧」という言葉を、明治時代に我々の基本的なスタンスの一つとして選び取った。その背後にある考え方としては、西洋の技術と土着の精神というものを分ける、つま

りこの精神と物質を二つに分けるという二元論が生まれてきた。この“和魂洋才”、つまり物質と精神を分けてしまうという考え方の中に、実はその後日本が歩む一つの道が既に用意されていた。しかし、この物質と精神を分けるという考え方は本当は違っているのではないか。西洋の技術もまた西洋の精神の所産としてとらえるべきものであり、我々はこの二元論を克服した新しい形の技術文化を作り出



▲川田順造氏

す可能性というものを探求しなければいけないのではないか。その必要性が指摘された。

③対等なパートナーとしての文化交流

文化交流・協力というものを行う場合に、お互いに対等な立場で交流するという「相互性」について、その重要性が指摘された。しかし今の日本は、最初は中国から、そしてヨーロッパ、最近に至ってはアメリカから大きな影響を受けて来るといふ、そういう一つの文化を摂取するという過程において、我々が知らず知らずのうちに築きあげてしまった一つのスタンスがある。それは外国の文化に対

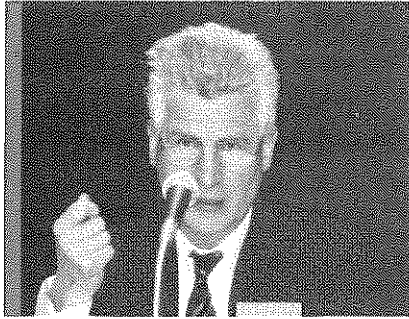
する大変ambivalentな態度であり、非常に優れたものに対して畏敬しそれに追従する。その一方で同時に日本的な価値を相対化することができなかった、むしろこれを特殊化してしまった。この問題は日本の例として挙げられたが、基本的には文化交流というものは相互に対等なパートナーとして行われなければいけないということが、基本的な考えとしてある。

④国という枠組みを越えた文化交流

現実問題として我々が文化交流を語る場合に、多くの場合は国と国との間での関係になる。ところが現在の世界では国家と国家の間には非常に大きな格差が存在している。それは経済的な格差であったり、社会的な格差である。従って本来は互恵的な、対等なパートナーとの間の交流であるべきはずの文化交流が、強い者から弱い者に流れる、富める者から貧しい者に向かって物が流れていく、そういう形になっていかざるをえない。こうした国を単位とした文化交流に必然的につきまとう矛盾というものをどう解決すべきか、ということを我々は考えていかなければならない。その場合にNGOの



▲ヌット・ナラン氏



▲ティエリー・ヴェルヘルスト氏

役割の重要性が指摘され、その役割に大きな期待が寄せられている。開発によって犠牲にされている少数民族、その立場の代弁者としてNGOが役割を果たす必要がある。しかも、その少数民族間の国という枠組みを越えた交流というものが実は新しい文化交流のパターンを作り出していくのに役に立つのではないか。

⑤伝統文化の継承についてのポイント

伝統文化に関して、その継承の問題についていくつかのポイントが指摘された。例えば市場性の問題をどう考えるかということ。むしろ我々はその伝統文化というものをそのままではなくて、むしろその伝統文化が形成された、創造された時代・時の息吹というものをどうしたら現代に生かせるかということを考えなければいけないという指摘。継承の問題に関しては、その伝統文化を支えている下積みの人達。表面に出ない人達、その人達が作りあげ維持してきている芸というものをどう継承していくかという問題。それからさらに最近発達した新しいメディアというものに伝統文化はどう対応していくべきか、むしろ積極的なメディアの活用ということによって新しい創造の可能性をそこに見だしていく必要があるのではないかという指摘がなされた。

⑥アジア太平洋地域が世界の文化交流に果たす役割

世界全体に対して、アジア太平洋地域の文化交流がどういう役割を果たすべきであるか、果たすことができるだろうか。ユダヤ、キリスト、イスラム教といった一神教的な世界観に基づく人間中心主義 (anthropocentrism) に対して、むしろアジア太平洋地域に伝統的に存在している多神教的、アニミズム的な世界観に基づく非人間中心主義あるいは脱人間中心主義と言った、non-anthropocentrismの在り方と、それが実際に現実はどういうふうに対応できるかというその可能性を探る必要が指摘された。人間の存在や人



▲ルールド・アリスベ氏

間の作り出した文化の意味を自然の中において根本的に考え直す、そういう作業の必要性が強調された。

パネルディスカッション

「21世紀アジア太平洋の文化の課題
—国際文化協力を考える—」

[司会]

石井米雄
(上智大学アジア文化研究所)

[パネリスト]

ヌット・ナラン
(カンボジア王国文化芸術大臣)
ティエリー・ヴェルヘルスト

(「文化と開発・南北ネットワーク」)

ルールド・アリスベ

(ユネスコ事務局)

トウー・ウェイミン

(ハーバード大学)

メアリー・ズルブツヒェン

(フォード財団)

このパネルディスカッションは、上智大学アジア文化研究所所長・石井米雄氏の司会により進められた。以下は、その概要である。

●パネリスト紹介

パネリストは以下の5名。

最初にカンボジアから参加のヌット・ナランさん。ナランさんはカンボジア王国の現在の文化芸術大臣、現職の大臣。しかし、同時にクメール文明すなわちカンボジア文明に関する民間の研究所 (Center for Documentation and Research on Khmer Civilization) の所長をもつとめている。アンコール・ワットについての著書もある。

次にメキシコから参加のルールド・アリスベさん。彼女は、現在ユネスコ本部の事務局長補であるが、メキシコでは大変著名な人類学者である。農村人類学 (Rural anthropology) の専門で、国際人類学民族学連合の会長もしている。



▲トウー・ウェイミン氏



▲メアリー・ズルブヒェン氏

3人目はトゥー・ウェイミンさん。トゥー・ウェイミンさんは現在ハーバード大学の教授をしている。専門は中国思想史で、特に中国の儒教文化史についての深い知識をおもちである。トゥー・ウェイミンさんには、東アジアの儒教文化圏の代表としての発言を期待している。

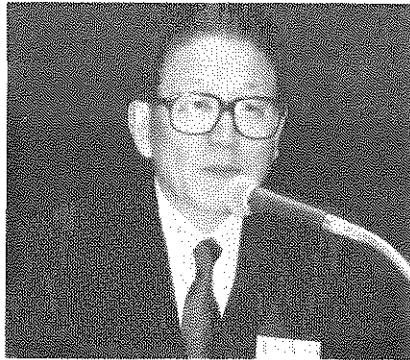
4人目はベルギーから参加のティエリー・ヴェルヘルストさん。ヴェルヘルストさんは、ベルギーのNGO「文化と開発・南北ネットワーク」所長。ヨーロッパのNGOという立場からの発言を期待している。出身がキリスト教文化圏ということだが、アジアのとりわけ仏教、ヒンズー教を背景とした知識人とも非常に交友を持っており大変幅の広い知識をお持ちである。

5人目は、メアリー・ズルブヒェンさん。ズルブヒェンさんは言語学者で、特にインドネシアのバリ島文化の専門家として業績を出している。その一方で、フォード財団東南アジア地域の代表としてジャカルタに長らく駐在し、インドでのお仕事も多い。

当初は6人のパネリストを予定していた。東南アジアのイスラム圏の代表者としてアブドゥールラフマン・ワヒドさんを予定していたが、大変残念なことに出発直前にスハルト大統領からの緊急な要件のために参加できなくなってしまった。イスラムの立場を代表しての発言を期待

していたので残念であった。

以上、パネリストとしては、東南アジアの仏教文化圏を代表してのヌット・ナランさん、東アジアの儒教文化圏を代表してのトゥー・ウェイミンさん、メキシコ（ラテンアメリカ）から参加のルールド・アリスベさん、ヨーロッパのティエリー・ヴェルヘルストさん、アメリカのメアリー・ズルブヒェンさんというメンバーであった。



▲石井米雄氏

●まとめ

先の川田氏による基調講演をベースに、各パネリストからのコメントに基づくパネルディスカッションの結果、以下のポイントが指摘された。

① 西ヨーロッパに始まる“enlightenment mentality”（啓蒙主義）の結果として近代がもたらされ、その延長線上に現在の我々の直面している開発の問題がある。ところがその開発が様々な矛盾を生んで再検討が求められている。

（発言者 トゥー・ウェイミン氏他）

② 今まで文化というと開発とか経済発展ということとは全く関係のないような考え方とらえられていた。しかし実際には開発政策の行き詰まりを克服するに

は、文化をもう一度見直してみる必要があるのではないか。我々は文化交流をもっと積極的に考えて、そこから新しい創造の道を見付けていかななくてはならないのではないか。

（発言者 ルールド・アリスベ氏、ティエリー・ヴェルヘルスト氏他）

③ 指摘されたいくつかの問題の中に、多様な価値観(Multi-culturalismあるいはCultural pluralism)ということが言われた。問題はその多様性、たくさんの価値がどう共存していくか、そのためにはやはりたくさんの価値観の存在というものを認めて、その価値観の間でのDialogueつまりCultural dialogue（異文化間の対話）が必要ではないか。

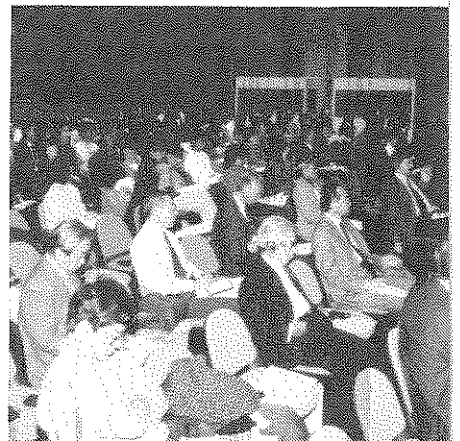
（発言者 メアリー・ズルブヒェン氏他）

④ 我々の行き詰まりというものを克服できる新しい道は、実はその文化的な対話によってもたらせることができるのではないか。その意味で我々が文化を議論することは、実は開発の問題あるいは発展の問題を考える上で相即不離の関係にある。

（発言者 ヌット・ナラン氏他）

（1995年1月9日

於：国際交流基金・国際交流フォーラム）



第1部：開発と文化——地域・参加・アイデンティティ

セッション1-1

「開発と文化—伝統文化の保存をめぐる」

a 「文化財保存と観光開発：地域と住民の発展からとらえなおす」

[コーディネーター]

石澤良昭（上智大学）

[パネリスト]

近森 正（慶応義塾大学）

ニコム・ムシガカマ（タイ国教育総監）

ウメシュ・ジャイデオ・パワンカル

（開発研究・活動センター、インド）

●はじめに

このセッションは、文化財の保存と観光開発、特に地域と住民の発展からとらえ直すというテーマをもって進められた。三人のパネリストからの熱心なプレゼンテーションでは、それぞれ大変重要なしかも緊急な、そして今後どうするかというそういう側面からの問題が提起された。

文化財の保存修復については既に抽象的には議論が尽くされている。しかし二十一世紀に向けて科学技術が発展し情報化が著しく進んで、世界の均一化が顕著になりつつある現在、グローバル化あるいはボーダーレスというような潮流の中で、文化財の修復・保存という事業はそうした流れとは反対に個性豊かな民族とその国に固有の文化あるいは歴史を作り出した人々の成果を証明する、そういうものとして重要である。

こうした文化財の保存修復あるいは観光開発というものを考えるときは、二つの考え方があるだろう。一つにその文化財が存在する国もしくはその民族、もしくはその住民の立場に立って考える観光開発あるいは文化財の保存という考

え方がある。もう一つは、グローバル化の点からも、国際的、世界的な立場、あるいは国境を越えた立場で保存していくという考え方である。

●パネリストからの報告

近森さんは、その文化遺産は誰のものなのかということを出発点としている。そうした発想の原点に戻ってみると、やはり文化遺産はそれを生み出した人間集団のものではないのか。個別文化に属する人々の子孫のものではないのかという概括的な報告であった。文化遺産・歴史遺産を我々が重要視するのは、そこにアイデンティティの問題があるからではないか。私たちのルーツを、私たちの過去の生活を、また現在続く生活をもう一度語り直すその材料になりうるからである。だからその点でも非常に重要なのだ。

文化財というのは、自然環境保護と同様である。自然を壊して我々の生活が成り立たないのと同じように文化財を破壊しては我々の生活を支えるルーツが成り立たない。そういう意味で非常に重要な問題としてとらえている。近森さんは、こうした歴史遺産の問題を南太平洋のマラエ（集団墓地）の保存修復によって、植民地化によって自分たちの歴史を失った人々が、そこに自分たちの祖先を、自分たちの存在理由を、新しい文化創造の原点を見いだしていることを、報告された。

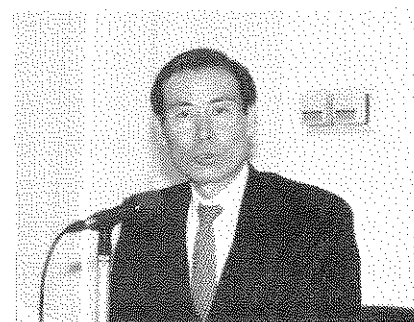
さらに、観光の問題については、エコツーリズムの可能性を指摘した。それは、

点から点への既存の観光ではなく、そこにある文化とそこに住む人々が参加することによって、面に拡げていく可能性である。

ニコムさんは、二十年あまりにわたってスコタイ歴史公園計画化プロジェクトを推進してきた。現在は、もう少し高い立場からそれを視察しているが、二十数年の経験からこの文化遺産の問題、文化財の問題を語った。

プロジェクトには二つの目的があった。一つは栄光の回復である。これは言うなれば過去の栄光、民族の栄光、そうしたものの回復である。そのためには三つの方法があった。一つはかつて王都であったスコタイの多くの寺院を復元修復する、あるいは現状維持のままでもそれ以上壊れないように措置を加える。二つ目は当時行われていたであろうと思われる伝統の儀式、お祭りの再現である。これは光のページェントのような、例えばスコタイ遺跡の灯籠流しの再興である。実際に遺跡の大きな貯水池に灯籠を浮かべるといった方法でとにかく昔の儀式やお祭りを再現する。三つ目は、当時の日常生活のレベルで何かを再現する。これら以外にも沢山あるが、三つの方法をあげた。

目的の二つ目は、スコタイという中部タイの地方地域で、地域経済の発展という問題も主眼においていた。それはまさに観光開発という問題である。



▲石澤良昭氏



▲パネリスト

こうした二つの目的をもってやって、二十数年にわたってそれなりに一つの仕上げができた。そうした成功の大きな要因はやはり地域住民の参加であった。住民に整備区域外に退去してもらうのに二年半もかかったというように、それはそう簡単ではなかった。やはり、そこにかけて住んできた人達の生活圏をいかにして他へ移し、かつそれが成り立つようにしてあげるのかという問題が重要であり、これを成功させるためには地域住民の参加が必要であった。

しかし、まだまだ問題がある。一つは、保存にはいろいろな地方で異なったやり方があるということ。そのとき、その地域にどんな技術があるか、どんな人がいるか、そのレベルはどうかというようなことをまず調査してから、文化財の問題に取り組んだ方がよい。そこには地方の特色なり、地方の特異性がある。そういう点への配慮が一つ。二つ目はそうした調査の後に基本的な人材の養成が必要である。三つ目は、文化財というのは盗掘の対象になっているということ。これは大きな問題である。文化財の一部が例えばアメリカにもち帰られて博物館に並べられている。その返還運動もやってきた。

ウメシユさんは、インドの開発研究・活動センターの研究員である。世界的な遺産であるアジェンタとエローラでの経験から、そこで起きたいろいろな問題を

六つに分けて指摘している。それらは動物の侵入であるとか、岩場の破壊あるいは亀裂であるとか、塩分の濃度あるいは温度であるとか、壁面剝離あるいは二酸化炭素であるとか、警備態勢であるとか、それから住民の所得が低いといった、さまざまな地域要因あるいは観光によってもたらされる相当深刻な問題点である。

それらをどのように解決していくかということは今後の問題ではあるが、原点としては地域住民に支えられた持続可能な開発、観光開発ということがやはり基本である。観光開発によって、地域社会はインフラの充実によって、水道、電気などが十分に供給されるようになり恩恵にあずかることができるだろう。また、学校を作って新しくその地域の人々の技術を養成していくことも可能となるだろう。

ウメシユさんは三つの点を最後に結論としてあげている。一つは観光開発はその地域の文化や伝統に配慮したものでなければならない。その地域の文化や伝統に敬意を払うべきだということ。二つ目は住民の参加であり、住民というのは受益者になり得るのだから、やはり主体的な住民参加が望ましい。三つ目は文化景観。むしろ文化景観に基づく遺跡だとか、そうしたものを文化資源として位置づけていく。そしてその適正な位置づけによってそれが観光の一つの資源になっていくことをはかるべきである。

●観光開発と国際協力

どのように観光開発を進めていくか。石澤氏は、これについて「文化財と住民と環境を基本にそれに観光が全部にかかわってくる。そういう意味で整然とした観光開発というものはやはり必要になってくるだろう。またしなければいけない。

そのときには、地域の発展計画、ある種のマスタープランに基づくものでなければならぬだろう。」という。

また、ニコムさんのスコタイの事例研究を例に「(観光開発は)プラス面とマイナス面がある。たくさん観光客とそれによる文化財の破壊の一方で、例えばたくさん収入、観光文化財保存観光開発という委員会ができた、非常に波及効果も大きい。」ことから、結論としては「歴史遺産の保存修復というのは学術的にもあるいは社会的にもあるいは文化的にもあるいは経済的にも非常に波及効果大きい」と結んだ。

最後に「国際協力」について以下の3点をコメントした。

- ① 国際協力の基本はその地域の自立を助けることである。それが文化遺産についてあるいは文化財に関しての国際協力の基本でもある。
- ② きちんとした調査研究というものが展開されなければならない。
- ③ その地方の社会文化発展というものを基盤においていかなければならない。ここにおいて観光開発という問題が出てくる。

(1995年1月10日

於：国際交流基金・国際会議場)



▲パネリスト

第1部会：開発と文化——地域・参加・アイデンティティ

セッション1-1

「開発と文化—伝統文化の保存をめぐる」

b「無形文化の保存、普及、継承：伝統保持と時代適用、市場性」

[コーディネーター]

徳丸吉彦 (お茶の水女子大学)

[パネリスト]

マックス・ペーター・パウマン

(国際伝統音楽研究所)

山下晋司 (東京大学)

メアリー・ズルブヒエン (フォード財団)

アラン・ファインスタイン (フォード財団)

●はじめに

無形文化財の一つである音楽を例にあげるなら、音楽は決して普遍的な言語ではない。しかしそれぞれの人間集団、文化が音楽をもっているという事実は普遍的なことである。しかし世界の中の多くの文化の中でその音楽が外部に知られているのは一体どれぐらいあるのかという質問が起ってくる。パウマン (パネリスト) さんによると、一万五千の文化の中から三千が知られているにすぎない。つまり我々はさまざまな人間集団の中で、五分の一についてしかその音楽を知っていないという。

他の文化、無形文化財、音楽でも何でもいいが、それを知るということは人間の中に多様性を認めるということの基礎になるだろう。このさまざまな多様性があるということは学校教育でも社会教育でも教えなければいけない事実であろう。しかし教えるための材料がないわけである。何しろ五分の一しか我々は知らないのだから。

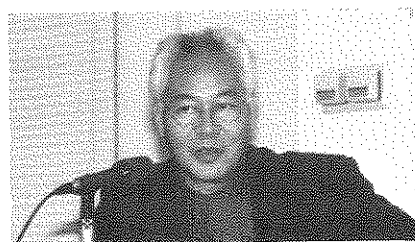
●パウマン氏からの報告

つまり、これから我々がやらなければならないことは、一つのデータベースを構築することであろう。パウマンさんによる「ミュージックファインダー」、音楽を探するためのデータベースの紹介は、さまざまな世界の音楽に人々が接近できるための試みである。映像と音、文献が組み込まれており、このデータベースはどんどん増えていくだろう。研究者がフィールドワークにいけばその分が増えていくという特徴がある。

こうした努力がともかく必要だということは、商業的なレコード、CDなどでは大多数の人間に受けるものがどうしても中心になるだろう。そうすると人数が多いかどうか別にして、民族の大きさではない文化的なマイノリティというのはどうしても抑圧される傾向にある。それを解決するためには、非常に大きなマーケットを作るよりもむしろ二つや三つの文化が共有するようなローカルなマーケットの構築を一生懸命やる方が賢明との意見が出た。

●フォード財団による事例

文化的なマジョリティとマイノリティ



▲徳丸吉彦氏



▲パネリスト

の間に大きな不均衡があるわけだが、フォード財団はこの点に関して25年にわたって努力したという報告をズルブヒエン氏およびファランスタイ氏からいただいた。インドおよびインドネシアにおけるケースの紹介であった。中でも、マジョリティの人達にマイノリティの音楽を紹介するプログラムは興味深い。

また、そうしたプログラムをフォード財団がインドで行ったという。インドは多言語の国だから、他の言語の芸能を紹介しようと思ってもできない。例えばベンガリで書かれたものを他のところへもっていくわけにはいかない。そのために翻訳の援助も行ったとのこと。

●山下氏からの報告

伝統というのはしばしば新しく作られるものだという山下さんからの報告。その例として、バリにおいて観光という人間の動きの結果生じた新しい伝統であるところのケチャが紹介された。ケチャとは人間の声である。観光というのはしばしば文化を汚染して、劣悪化するというか、そういう風にマイナス面でもとらえられることが多いのだが、これが正しいわけではない。観光がケチャのような新しい文化を創造したり、文化を活性化するための助けをしていることも随分ある。

同じく山下さんから、柳田国男によって有名になった岩手県の遠野村の例が紹

介された。そこでは、新しく文化施設を作ったことによって昔風のお話、口頭伝承というものがいきいきとして伝承されているという。これは観光という外部の人間を意識した行為がいかにか文化を活性化させるかということの一つの例であろう。

●コーディネーターによるまとめ

このセッションの五人は、伝統や文化というものを固定したものとして考えてはいない。伝統は変化する、という共通の理解がある。つまり、無形文化財の保存についても固定したものとして記録すればいいというのではなくて、生きた伝統として、動態的な保存をしなければならないというのがこのセッションでの結論である。

また、このことを実現するためには短期的にはデータベースをどんどん構築する必要があるだろう。そして、それぞれの文化のもつ音楽やその他のパフォーマンスを知る必要もあるだろう。

このように考えると、一番重要なことは我々人間一人一人が多様性を認めることである。それは、他人のやり方を認めることで、そのことがない限りこの無形文化財の保護ということは成功しないだろう。そういう一つの哲学、態度を養成していくことが非常に必要だという結論である。

(1995年1月10日)

於：国際交流基金・国際会議場



▲パネリスト

第1部会：開発と文化—地域参加・アイデンティティ

セッション1-2

「NGOと文化協力—地域社会、参加、アイデンティティ」

[コーディネーター]

生江 明 (社会開発国際調査センター代表)

[パネリスト]

シェク・アブダット・ダイヤン (グラミン・バンク)

ジューン・プリル・プレット (フィリピン大学)

手束耕治 (曹洞宗国際ボランティア会)

ティエリー・ヴェルヘルスト (文化と開発・南北ネットワーク)

●はじめに

文化は変化するものである。そしてその変化を促進しているものはこれまでのところ開発、もしくは近代化というものである。そして、開発および近代化促進の過程では、人数的には圧倒的多数でありながら社会的存在としてマイノリティの立場に置かれている人々が、客体化されている。つまり主体として生きることなく、客体として生きざるを得ない状況に置かれている。

このセッションでは、そうした状況の中に置かれている人々と現場をとおしてかかわってきたパネリストからの報告をもとに議論が進められた。ここでの議論は、以下の三つの点に要約できよう。

① 現場で生きる人々の姿は、非常に多様である。それは人々の生きる場が多様であることと関係しよう。彼等は、

自然環境とともに生きる、あるいは社会環境と自然環境の中で生きる、というようにそれらの条件の多様性に関わり、そしてその中で生き抜き続けてきた人々なのである。

② 彼等の姿から学んだことは、文化というものはテクニカルに分類される一分野としてあるのではなくて、それらをすべて生み出す基盤であること。それは人間が人間であるための不可欠な存在であり、非常に大きい存在であること。

③ これまでの開発の在り方とは違う、我々人間全体のholisticな在り方を問うものとなる、という予感を強く感じる。そしてその人々と共に生きようとしてきたNGO等の努力あるいは経過の報告が示唆するように、つまりどうあることが人々と共に生きることであるのかそれが語られたのではないか。

●ヴェルヘルスト氏からの報告

ヴェルヘルストさんは、「開発という概念あるいは言葉というものは実は単一、一つの本の軸の上で先にいってその後



▲生江 明氏



▲パネリスト

ろなのかという単一軸上の概念として働いてきた可能性が非常に強い。」と言う。従って、「もしかすると開発あるいは貧困という言葉を使うこと自体が、実はある単一軸上の世界に人々を招き入れること、あるいは相手が相手のリングで生きているのに私のリングの上に連れて来て私のリングの上で君は能力がないではないかというふうに評価する、そうした働きをもっている概念なのではないのだろうか。」と。

つまり開発という概念はそのとらえ方によっては世界を一元化していく装置として働いているのかもしれない。それは文化がそもそももっている多元性と非常にぶつかりあうものであるかもしれないという指摘である。

そして実に多様な人々の価値あるいは暮らしというものが紹介されて、なかではそうした多様な人々の暮らしに対してやたらと人々を教えたがり、人々の自尊心を無視し、たくさんのお金をもってきて働こうとするNGOも存在する、そうした危険性も指摘する。それは新しい形の植民地主義ともいべきものであるかもしれない。

こうした開発に対して、それを人間の側に引き戻す役割をもつ可能性があるかも知れない文化の中にも実は危険性がある。どのような危険性かという、それは文化の純粋化を目指す原理主義である。

人間が他者から互いに学んできた、またその学んでいく過程、選択するプロセスそのものが実は文化である。しかし、原理主義というのはその選択するチャンスとプロセスを破壊してしまう。この純粋主義はたとえば父性もしくは男性原理によるある文化の純粋化が、その中で弾き出されていく母性もしくは女性原理の排除を伴うとき、もしかすると開発の中で惨めにやせ細っていく文化の姿を象徴する場合もある。

●ダイアン氏からの報告

グラミンバンクのダイアンさんからは、圧倒的多数ではあるけれどもマイノリティとして生きざるを得ない人々、それが実は貧困の文化というものをもっている、もってしまうという指摘があった。それからの回復を試みるときに大切なことは、貧困のもっているさまざまな特徴、乳児死亡率が高いとか字が読めないという特徴、その指標を変えようとするのではなくて人々が資源にアクセスすることを可能にすることである。つまり、小規模のローンを出すと、そこからプロジェクトを始めていくそのことによって、人々が自らの運命を決めていく確かな大地を作ろう、そのことが指標をあげることではなくて人間の生きる基盤を誇りある豊かなものにする。

そして約20年の活動の中でそれが見事に証明された。それはNGOとしてのグラミンバンクの仕事というよりは人々の方が証明されたというふうに理解される。そしてそのグラミンバンクのメンバーの94%が女性でありその最高決議機関の理事会の13人のメンバーのうち9人が女性である。しかもバスに始めて乗って学会にやってくる、あるいは電気も何もないという状況の中で世界的に有名になった

このグラミンバンクの理事会というものがそうした人々によって動かされている。つまりそれは女性の力を示すことに実は結実した。開発の文化を作れる人々を作るのがNGOの仕事ではないだろうか。

●手束氏からの報告

曹洞宗ボランティア会の手束さんから、少数民族あるいは難民キャンプの人々、つまり離散状況にあり自分の文化から自分の生活の場から足を切られた人々を支援する活動の報告があった。それは文化あるいはアイデンティティーが人間にとって不可欠なものであること、それをまざまざと知る経験であった。そしてその時にNGO、外のアウトサイダーの側である手束さん達は、初めは相手のことを何も知らない。そしてNGOとしてはあまりにも力のない段階であったので、キャンプの人々に助けられそしてその人々の誇りに触れそれを支えることが自分たちの仕事だと知ることになっていったというプロセスが語られた。

そしてその中でご飯、食べる物が必要である以上に実は文化というものも必要である。あるいは一日の糧を得ること、そして文化は実は永遠の糧を得ることだとそういう報告であった。それはもしかするとボル・ポト派の人々が殺した僧侶、それは僧侶という肉体は消えたけれどもより強く人々の心の中に甦って



▲パネリスト

いったのではないが。

●ブリル・ブレット氏からの報告

ブリル・ブレットさんの報告はそうした人々の中にあり文化を育ててきたものが、実は自然と人々の社会、その二つのあわさった複合体であるという指摘である。それがコルディレラ地方の山岳少数民族の事例の中で語られた。文化的アイデンティティーの枠組みというのは、人々の暮らす自然と人々の暮らしそのものであると。

しかし、政府の開発政策が山岳少数民族を「国有地化宣言された森林内に不法に占拠している人々」であるというふうに一方向的に決めつけた時から彼等の文化は脅かされている。そこで文化の多元性というものは地域の多元性、そしてその尊重の中で初めて生きていく。それを保証するのは実は国境を越える多様なネットワークの中で果たされるのではないだろうか。それはNGOあるいは住民組織によるかも知れない。そしてそのことによって国家もまた変わっていくだろうと。

以上4人のパネリストの報告を受け、コーディネーターの生江氏は次のようにセッションの感想をまとめた。

「一人一人の方たちの報告が私たちのすべてのまとめを語って下さったような気がする。マイノリティーという少数者は、人数の問題ではない。マイノリティーというあるいはインフォーマルな場面を見ることによってその文化の社会、その社会の文化というものがどんなものであるのかわかるだろう。」

(1995年1月10日)

於：国際交流基金・国際会議場

第2部会：グローバリゼーションと文化—変容、創造、そして共存

セッション2-1

「越境する大衆文化——1つのアジア大衆文化の成立なのか」

[コーディネーター]

橋爪大三郎 (東京工業大学)

[パネリスト]

斎藤英介 (株式会社アミューズ)

白石さや (コーネル大学)

ディヴィット・ウー (香港中文大学)

●はじめに

このセッションでは、アジアが文化的に一つのまとまりを今後生み出すのだろうか、というテーマについて議論が行われた。特に、文化の一領域としての大衆文化というものが非常に各国に相互乗り入れしているという動きがある。議論の際、この事実をまず知りその意味するところを考えてみることにした。

また、このセッションでは問題を文化領域に限定した。すなわち政治や経済の話は一切議論しない。また、上述のとおり大衆文化にさらに問題を限定した。いわゆるポップカルチャーに焦点を絞った。ハイカルチャー、高級文化については一切問題をオミットした。最初に、越境する大衆文化の例としてパネリスト3名からそれぞれ具体的な事例の報告があった。

●パネリストからの報告

音楽事務所アミューズの国際部長として、アジアの歌手を日本に紹介する活動をしている斎藤さんからの報告によると、はじめこのアミューズという事務所は売込み先として、アメリカにアプローチをしていた。しかしアメリカでの音楽ビジ

ネスはどうもうまくいかなかった。例えばロックとかを日本からアメリカに持って行っても、こちらでは向こうにヒットしそうな要素を備えていると思われるにもかかわらず、多分アメリカから見るとアジアから変なものが来たというふうに見られてしまう。厚い壁があった。

そこで方向転換として1990年に香港にマーケットリサーチもせずに事務所を開いたわけだが、ここで電話をかけまくったりしていろいろビジネスを展開してみたところ仲間として受け入れてもらえるというふうな感触を得る。そこで米国からアジアに方針を転換するというビジネス上の決断を行った。

斎藤氏の報告では以下のエピソードが興味深い。

- ① これからはいろいろな面で中国が非常に大きな世界的マーケットとして現れてきて、英語と北京語の時代になるだろう。そこにまず日本は十分気が付かなければならない。
- ② そういう国際的なネットワークの中で新しい文化を生み出していく。それによって今後の日本の文化ビジネスの



▲橋爪大三郎氏



▲パネリスト

最前線がある。

2番目の報告は白石さん、取り上げられたのはドラえもん。ドラえもんはマンガだが動画となりテレビで各国に放映されている。インドネシアで放映されてそれが非常に受容されて子供達に受け入れられていくというプロセスを体験したのでそれについてのいろいろな分析的考察が報告された。

ドラえもんは未来からやって来たロボットで、アメリカの映画の主人公ターミネーターと違って非常に現在の人達に対して優しい。そしてポケットからいろいろなハイテク製品を取り出して問題を解決して行く。これは日本のハイテク産業社会が消費者にとっての態度と同じものであると考えられるのではないか。そうするとドラえもんは資本主義の象徴であるということもできるだろうし、あるいはさらに踏み込んで言うとアジアの国々の細かな差異というのに気が付き、それにふさわしい製品を送り込んでいる日本の企業活動の象徴というふうにも捉えられるのではないかという示唆があった。

3番目の報告者としてデビッド・ウーさん。ウーさんは東京、上海、香港とさまざまなアジア都市における若者文化が共通の特徴をもって成立しているという事実に注目している。そして特に例とし

て取り上げたのは食べ物、食文化であった。これは従来注目されることが非常に少なかった領域である。印象的な例としては、ケンタッキーフライドチキンが香港に出店した時の話。最初はマーケットリサーチが十分でなかったので失敗した。というのも、唐揚げの鳥というのは漢方という非常に良くない「気」を体の中に生むわけであり、常識に合わなかったために進出は失敗した。

2回目に進出したときにはその点を十分に研究していたので、フライドチキンは今成功している。このように食文化に限ってではあるが、進出するときには十分なマーケット戦略が必要であり、受け入れる側に暗黙のうちに存在する、人々が持っている社会的文脈というもの、それを発掘していく作業が必要だという。

以上3名のパネリストからの報告を踏まえ討論を行った結果、次のことがポイントとしてあげられた。

- ① 各報告者で当然踏まえられていたこととしてあるのは、アジア地域の非常な異質性、多様性ということ。アジアは一つであるという単純素朴な前提からは議論は進まない。これは当然のことながらパネリストの一致した見解であった。それではその異質性の壁を越えてどういふような文化的な越境が起るのであろうか。そのためにいろいろな条件があるらしいということが議論された。一つは先ほどの社会的文脈のようなものである。
- ② 言語の関与つまり言葉があると越境しにくいという問題があるのではないか。食文化の場合はあまりこうしたことは問題ないが、言葉が絡むものになると例えば音楽などは歌詞の問題があ

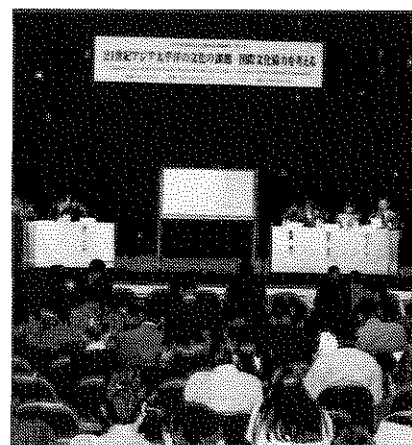
る。越境しにくいということがあるのかどうか。

- ③ アメリカの問題。つまりアメリカナイズーションということがアジアの都市文化の間では非常に広く起こったわけだが、これはもしかすると越境の原因になっているのかどうか。結論は出なかったが関係はありそうだ。
- ④ 大中華圏の存在。アジアにおいてはやはり中国のプレゼンスが大きい訳だが、これがどれくらい重要になるのかどうか。

●おわりに

最後に司会の橋爪氏より以下のコメントがあった。

- ① アジア地域における文化の越境というのは現在進行中のプロセスである。考えてみるのはとても大事だが、もう少し様子を見ないとわからないというところがある。
- ② しかし、実は我々はもうその動きの中に巻き込まれているわけで、自分たちがその文化を作っていくという態度でなければならず、たんなるオブザーバーで済む問題ではない。そのためには、パートナーを見付けていくことが大切だろう。もうビジネスは日本だけ



▲パネリスト

でできるものではない、このことはビジネスだけでなく文化活動でも同様だろう。

- ③ パートナーは、アメリカ人であるかもしれないしベトナム人であるかもしれないし何人であるかわからない。しかし、そのパートナーと理解しあって事柄を進めていくことが新しい文化創造の道である。もうそこしかない。
- ④ パートナーを見付けて国際協力のネットワークを作っていくというときれいごとに聞こえる。しかし、偏見という問題は無視できない。先ほどのアミューズという会社はやはり最初にアメリカに向かってその次にアジアに向かって新しい発見をしていった。やはり偏見があったし今もあるだろう。あるいは日本全体にとっても歴史に直面していないという意味でどこかにコンプレックスを隠している部分がある。
- ⑤ この偏見というものをきちんと見据えていかないとパートナーは組めないのではないか。それはおそらくよその国にも言えることであり中国や韓国や様々な国にお互いの文化に対する偏見や誤解というものはあるだろう。この所在をきちんとえぐり出していくということも文化に携わる者の仕事ではないだろうか。

(1995年1月10日 於：国際交流基金
・国際交流フォーラム)



第2部会：グローバリゼーションと文化——変容、創造、そして共存

セッション 2-2

「転位された文化—ディアスポラ状況での文化創造と喪失経験」

[コーディネーター]

今福龍太 (中部大学)

[パネリスト]

イ・ヨンスク (大東文化大学)

トリン・ミンハ (カリフォルニア大学)

鷺澤 萌 (作家)

カレン・ティ・ヤマシタ (作家)

●はじめに

このセッションでは、文化の転位(Displacement)の動きとかディアスポラ(民族の離散)をテーマとするが、それを人間の無数の現代的な離散の状況あるいはある特定の文化の消滅、変容というようには考えてはいない。むしろ文化が現在出現する現場、あるいは文化というものがある動きの中で生成されてくるような現場というのは、むしろそうしたディアスポラというような状況の中でしかありえないのではないだろうか、という大胆な仮説、そういう一つの視点が共通なものとしてあった。

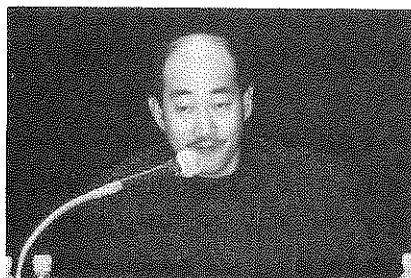
必ずしも消化しきれていない、場合によっては特定の歴史的な文脈の中でしか使われてこなかった転位、ディアスポラという言葉、あえて現代の文化・世界の文化を見通して行く上での一つの戦略的な概念として考えてみることで、そこから一体どういうものが見えてくるか、ということがこのセッションのテーマであった。

●パネリストからの報告

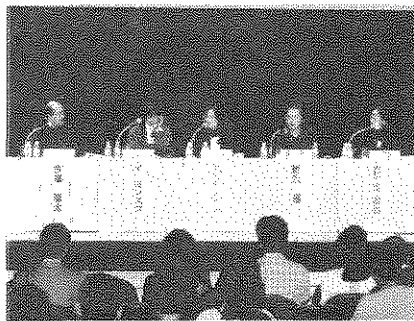
4人のパネリストの方は、いずれも自分がどこからやって来た、何々人であるというようなことを簡単には説明できないような経験をもつ人々である。

最初に、トリン・ミンハさん。ベトナム系のアメリカ人として現在カリフォルニアで映画・映像作家、作曲家、そして批評家、小説家として活躍している。トリンさんは、文化政治学の中の主体(Subjectivity)の問題を中心に話した。

彼女は、自分を「As誰々」という一つの特徴的な表現があるということを強調した。常に世界あるいは文化というものは特定の個人に対してそのasというものを求めていく。そのasという表現、as a feministでもいいし、あるいは他のものでもいい。しかし、彼女の場合いろいろなasが存在しうるわけであり、どのasをとった場合でも、それは差異(difference)が消費される一つの仕方である、と強調している。従って、主体というものは常にそれをasという形で設定したとたんに、ある種の権力的な装置によって常に消費される方向に向かうのだという。



▲今福龍太氏



▲パネリスト

イ・ヨンスクさんも、同様に固有名詞という問題を探り上げる。固有名詞というのは普通名詞と違って、いわゆる特定の言語体系、ラングの体系を越境することができる。普通名詞であるとそれが別の言語によって翻訳されていくわけだが、固有名詞というのはそのまま、例えば個人の名前であるとか場所の名前であるとか、そうしたものは一般にはそのまま越境していく。

この固有名詞のもつ固有名詞的論理というものにイ・ヨンスクさんは注目し文化を翻訳していくというパラダイムによって、今までのような世界文化のコミュニケーションが語られていた状況を越えていく新しいパラダイムの創造の可能性を指摘する。それを彼女自身のバックグラウンドである韓国と日本の関係の中において、創氏改名という形で日本が韓国人に対して迫った一つの暴力的な固有名詞変更の動きを説き明かした。

鷺沢さんの報告は、作家としての自らの在日性、自らの祖母が韓国人であったということ、二十歳のときに初めて知るといふ経験の中から、自らの在日性というものを確認している現在、作家としての主体性というものについてであった。

カレン・テイ・ヤマシタさんは、日系アメリカ人の三世としてカリフォルニアに住んでいる。ブラジルの日系社会を長い間研究し、日本にも非常に若いときに

来て自分の祖先のルーツを探った。山下さんはディアスポラという軌跡の中に入りこんで「純粋な日本人」という概念をさまざまな形でずらしながら、その「純粋」という概念自体がハイブリッド化されていってしまう、そういう状況を自ら体験してきた。

●コメンテーターによるまとめ

今福氏は、パネリストの発表を通しての感想として、「名前、名付けるということ、特定の固有名詞を与える、あるいは引き受けるという問題とそこからどのように離脱していくのかという、名前と実践との間の継続的な往復運動の問題が存在するのではないか」という。

さらに、結論として現在世界の文化を語る以下2つの大きいパラダイムの存在をあげた。

- ① ある種の権力によって一つに統合された領域がある。そこから生まれる文化というものがある。国家とか民族共同体あるいは国連のようなもの、一つの統合された領域というものを想定して世界を見ていくという装置である。
- ② 二つの対立した世界というイメージの中で考えていく、中心・周縁あるいは先進国・開発途上国、第一世界・第三世界、北・南あるいは都市・農村。どのような対立関係でもいいが、いずれにせよ二つの対立する世界の一方に支配権力の所在において、もう一方は搾取される対象として描くそのようなパラダイム。

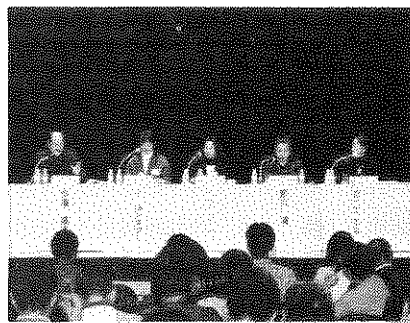
そしてこのセッションでの議論は、恐らく上記のどちらでもない場にていくということ。つまり一つに統合された領域に住むのでもないし、二つの対立する世界に何か視点の根拠を置くのでもないような、そのどちらでもないような場にていくという考え方ではないか。

それをトリン・ミンハさんは、Nowhereと呼称した。これは、どこでもない場所という意味である。語呂合わせをするなら、NowhereをNoとWhereと分けずにNowとHereに分けることもできるわけで、後者のとおり読むなら「今現在のここで」という意味になるわけである。結局、周縁というのは第三世界と呼んでもいいのだけれど、第三世界の人間にとっては戦場の場であると同時に彼らの巡礼の土地でもある。そういう関係にあるにもかかわらず、周縁が周縁者として失地回復の声を上げるといふことが二つの世界の対立関係の中で存在している。

第三世界論もすべてそういう形で考えられるわけだが、そのことが結局、中心を喜ばせているのではないか。ある種の仮定だが、つまり周縁が周縁者として失地回復の声を上げれば上げるほど明確に中心と周縁は境界づけられているのではないか。だから、現在の文化政治学には非常に複雑な力学が動いている。

だから我々が今「Now Here」というような場、これまでおそらく言語によって考え出されたことがないような新しい文化を語る場合に果たしてたどり着くことができるのかどうかということがこのセッションの主題であった。

(1995年1月10日 於：国際交流基金
・国際交流フォーラム)



▲パネリスト

トヨタ財団設立20周年記念

ノンカイおよびハノイ・シンポジウムを開催して

プログラム・オフィサー 牧田東一

標記シンポジウムは、いづれも多くの発表を通じて意義深い議論が展開された。その全容を短い紙面で紹介するのは困難なため、以下に筆者の簡単な感想を記した。また、プログラムについては次ページの表を参照いただきたい。

1. 文化の定義について

ノンカイでもハノイでも、参加者の間で文化を人々の生活様式 (way of life)、考え方 (way of thinking) を含む、人間生活の総体として、広く定義することが、ほとんど異議なく受け入れられた。

これは社会が全体として大きく、急激に、変化しており、文化を社会や経済のコンテキストから切り離して考えることが不可能になっていること、と関係していると思われる。

2. 文化と社会問題

社会、文化が急激に変化しており、変化が早すぎて、人々が適応できない面が多く出ている。伝統的な価値観と道徳の崩壊が新しい種類の社会問題を引き起こしている。ノンカイで話された主要な社会問題は、子供の問題、観光・売春・エイズの問題である。ハノイで出された問題は、売春・エイズ、家族の崩壊とそれに伴う老人問題などである。そのために、価値観・道徳を立て直す必要が語られた。女性、子供、老人、少数民族などの社会的弱者に対する政策の必要性の認識が共有されたが、具体的に有効な方法は会議の場では見いだされなかった。

3. 文化と自然環境、indigenous knowledgeについて

文化は急激に変化しており、それは生産様式の変化と深く関わっている。タイでもベトナムでも、アジアの他の国々でも、農業から工業へ、自然と協調した生活から自然を開発のために利用する生活へと変化している。そのため、多様な環境の中で作り出されてきた多様な生活の方法としての文化が消滅しつつある。また逆に、多様な文化が消滅することによって自然の多様性が消滅している。自然と自然に適応した文化は、実は表裏一体のものがある。

多様な環境の中で生活するために作り出されてきた多様な生活の方法としての文化はノンカイのシンポジウムではlocal wisdomと呼ばれ、ハノイのシンポジウムではindigenous knowledgeと呼ばれた。ノンカイのシンポジウムで話されたlocal wisdomは、農業をベースとするタイの伝統的生活の中から編み出されてきた生活の方法とそれを基にした祭や儀礼、世界観のことである。ハノイで話されたindigenous knowledgeは、山地少数民族が森



の中で暮らすために生み出してきた生活の方法とそれを基にした祭や儀礼、世界観のことである。多くの研究が、こうした知恵は、自然と調和して、自然を破壊することなく、人々が生計を営んで行くための科学的・合理的な方法であることを明らかにしている。しかし、人々の生活が変化していく中で、環境も変化し、こうしたindigenous knowledgeの有用性が失われている。ノンカイでも、ハノイでも生物種の多様性 (biodiversity) の保持とのアナロジーで、それを研究し近代的な生活のalternativeとして何らかの形で生かしていくことの重要性が語られた。

4. 文化と経済発展

経済発展が、開発の究極的な目的ではなく、精神的な充足を含む生活の質の向上が必要である点が了解された。そのためには経済開発と同時に、社会・文化開発が必要であることが広く認識された。同時に、経済発展が人々の物質的生活を高めるために必要であることでも一致した。

5. 近代化とアイデンティティ

ノンカイでもハノイでも、文化の西欧化 (近代化) が主要な話題となった。そのことの評価は賛否が分かれた。それを、新植民地主義としてとらえる人々もいた

(P. 16へつづく)

ノンカイ・シンポジウム

テーマ：Thailand in Cultural Change

日時：1994年11月15日, 16日

場所：Holiday Inn, Nong Khai, Thailand

主催者：トヨタ財団、タマサート大学（設立60周年記念）、社会人文学教科書プロジェクト促進財団

プログラム：

第1日（1994年11月15日）

開会挨拶：黒川千万喜（トヨタ財団常務理事）

基調講演：Professor Saneh Chamarik

（社会人文学教科書プロジェクト促進財団理事長）

Session 1: "Culture in Change: A Perspective"

Moderator: Chaiwat Tirapanta (バンコック・フォーラム)

Panelists: Thirayuth Boonmi (タマサート大学社会学人類学部), Michael Wright (バンコック銀行), Naiyana Supapung (Thai Women Labor's Friend in Asia Project), Uthai Dunlayakasam (子供財団、シルパコン大学), Shalardchai Ramitanondh (チェンマイ大学社会科学部)

Session 2: "Local Wisdom: Dead or Alive?"

Presenter: Chantana Panpasirichote (チュラロンコン大学社会研究所)

Discussant: Uthai Dunlayakasam (シルパコン大学)

Moderator: Virada Somswasdi (チェンマイ大学女性研究センター)

Session 3: "Textile and Social Meaning"

Presenter: Songsakdi Prangwatanakul (チェンマイ大学人文学部)

Discussant: Jiraporn Aranyanark (国立博物館)

Moderator: Thitirat Ladawan (タマサート大学文学部)

第2日（1994年11月16日）

Session 4: "Isan Sim: Northeast Wisdom"

Presenter: Wiroj Srisuro (コンケン大学建築学部)

Discussant: Santi Laeksukhum (シルパコン大学考古学部)

Moderator: Muneé Panthawee (シーナカリンウィロート大学マハーサラカム校)

Session 5: "Tourism VS. Local Culture"

Moderator: Thanet Arpomsuvan (タマサート大学文学部)

Panelists: Thaweesilp Suebwathana (シーナカリンウィロート大学マハーサラカム

校), Boueliane Sikhaxay (ラオス情報文化省次官), Rujaya Abha-korn (チェンマイ大学人文学部), Sathaporn Srisajchang (シーナカリンウィロート大学南タイ研究所)

Session 6: "Thai-Indochina: A Cultural Exchange"

Moderator: Songyote Waehongsa (社会人文学教科書プロジェクト促進財団)

Panelists: Theera Nutpiam (シルパコン大学芸術学部), Maha Samrith Buasiswath (ラオス・ワナシン雑誌・アドヴァイザー), Winai Phunampon (シルパコン大学芸術学部), Sriprapa Petmeesri (総理府技術経済協力部)

ハノイ・シンポジウム

テーマ：Social and Cultural Development in the Context of Economic Growth in Asia

日時：1994年11月24日, 25日, 26日

場所：Ministry of Defence Guesthouse, Hanoi, Vietnam

主催者：トヨタ財団、ベトナム社会人文学科学院

プログラム

第1日（1994年11月24日）

開会挨拶：Nguyen Duy Quy (ベトナム社会人文学科学院長)

同：小倉和夫（駐ベトナム大使）

基調講演：Nguyen Di Nien (ベトナムユネスコ国内委員会委員長・外務次官)

Session A: "Development of Social and Cultural Institutions and Facilities"

Chairperson: Pham Xuan Nam (Vice President, National Center for Social Sciences and Humanities-以下 NCSSH, Vietnam)

Presentation: Edi Sedyawati (Director General of Culture, Indonesia), Houmphanh Ra-ttanavong Institute of Social and Cultural Studies, Laos), Hoang Trinh (NCSSH, Vietnam)

第2日（1994年11月25日）

November 25, 1994

Session B: "Gender and Sociocultural Development in Asia"

Chairperson: Le Thi Nham Tuyet (Research Center for Gender, Family and Environment in Development, Vietnam)

Presentation: Yasuko Muramatsu (Tokyo

Woman's Christian University, Japan), Virada Somswasdi (Center for Women's Studies, Chiangmai University, Thailand)

Le Thi (Center for Women's Studies, NCSSH, Vietnam), Dang Thanh Le (University of Hanoi, Vietnam), Urvashi Butalia (Kali for Women, India), Lu Aiguo (Institute of World Economy, China), Thai Thi Ngoc Du (Women's Semipublic University, Vietnam), Dang Bich Ha (NCSSH, Vietnam)

Session C: "Ethnic Minorities in Asia: Their Cultures and Natural Environment"

Chairperson: Neil L. Jamieson (Winrock International, U.S.A.)

Presentation: M. Abdus Sabur (Asian Cultural Forum on Development, Thailand), Agustinus Rumansara (Foundation for Entrepreneurship Development in Irian Jaya, Indonesia), Pham Huu Dat (Center for the Compilation of Encyclopedias, Vietnam), Be Viet Dang (NCSSH, Vietnam), Ponciano L. Benagen (Social Science Council of the Philippines), Hood Salleh (National University of Malaysia, Malaysia), Xu Jian-chu (Kunming Institute of Botany, China), Vo Quy (University of Hanoi, Vietnam)

第3日（1994年11月26日）

Session D: "International and Intercultural Relations in Asia and Prospects for International Cultural Co-operation"

Chairperson: Vu Khieu (NCSSH, Vietnam)

Presentation: Hedayat Ahmed (Director, UNESCO Principal Regional Office for Asia and the Pacific), Nguyen Co Thach (Former Deputy Prime Minister and Foreign Minister of Vietnam), Nguyen Dinh Quang (Ministry of Culture and Information, Vietnam), Shaharil Talib (University of Malaya, Malaysia), Cecily Cook (Asian Cultural Council, U.S.A.), Tatsuya Tanami (The International House of Japan, Japan)

し、また、民主主義、物質的な生活水準の向上などをもたらしたものとして評価する声も多かった。

欧米の強い文化的影響の下で、アジアの国々の文化的アイデンティティの弱体化を心配する声は多かった。一方で、文化は変化するものであり、欧米に限らず外の文化の良い面を取り入れて、新しい文化を作っていくべきであるという意見も多く出された。

6. グローバリゼーション、文化協力、対話

ノンカイでも、ハノイでもグローバリゼーションという言葉がよく出てきた。しかし、その持っている意味 (implication) については、むしろ今後のこととして、つっこんだ議論にはならなかった。

文化協力という点では、アジアの国々が余りにも互いを知らないと言うことが多くの人から指摘され、まず相互理解を深めることが急務であることで一致した。特に、冷戦構造の中で高い壁のあったASEAN諸国とインドシナ諸国・中国の間の心理的な壁や知識の不足を埋める必要が認識された。

少数民族の文化と開発をめぐるパネルでは、開発のプランが中央によって作られ、それが人々に押しつけられるのではなく、しばしば国境を超えて、村と村の間で、地方と地方の間で、地域と地域の間での協議 (consultation) と対話 (dialogue) を重ね、議論を通じて解決策が見いだされるべきであるとの指摘がなされた。従来の国際的な、文化間 (intercultur-

al) の対話のなかに入ってこれなかったこうした人々をどのように、対話の中に入れるのかという新しい課題が提示された。

最後に、上に述べた全ての議論の中で女性の果たし得る役割が、たびたび言及されたことを報告したい。

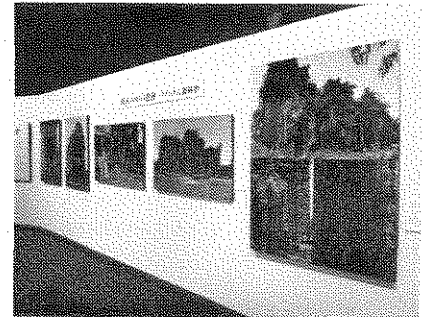
「チャンパの王国の遺跡と文化展」を東京にて開催

昨年度よりトヨタ財団設立20周年記念事業の一つとして名古屋、福岡、広島において実施して参りました標記写真展が1月12日 (木) より28日 (土) まで国際交流基金・国際交流フォーラムのイベントスペース (東京・赤坂ツインタワー1階) にて開催されました (右関連写真)。

期間中は、合計4,000人を越す入場者の方でにぎわいました。また、2月の14日 (水) より26日 (日) まで大阪 (大阪国際交流センター) にて開催いたしますので御協力の程お願いもうしあげます。

【お断り】

今回の財団レポートのうち、P2からP14までに掲載の記事内容につきましては、シンポジウムでの司会、パネリスト、コーディネーター他の発言内容をもとにトヨタ財団事務局の責任において編集いたしました。



▲会場パネル

訂正

トヨタ財団レポートNo.70の掲載記事「トヨタ財団設立20周年を記念して」の中で、豊田英二会長の肩書きが一部「名誉会長」と記載されておりました。これは「会長」の誤りです。この場をかりて訂正させていただきます。

都心の窓から

大変遅くなりましたが、国際シンポジウムに関する報告をさせていただきました。しかし、一部紹介できなかった内容もございます。

さて、1月17日未明に起こった「兵庫県南部大地震」による大きな被害、被災者の方々にはお見舞い申し上げます。当財団でも少額ではありますが職員による募金を実施いたしました。

今回のシンポジウムで「開発政策のいきどまり」というコメントを耳にしました。地震という自然災害による被害が予想外に大きかったこと、このことと決して無縁ではないのかと考えます。

トヨタ財団レポート No.71

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛お申込みください。

発行日 1995年2月20日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 黒川千万喜
編集者 田中泰一
印刷 真友工業株式会社